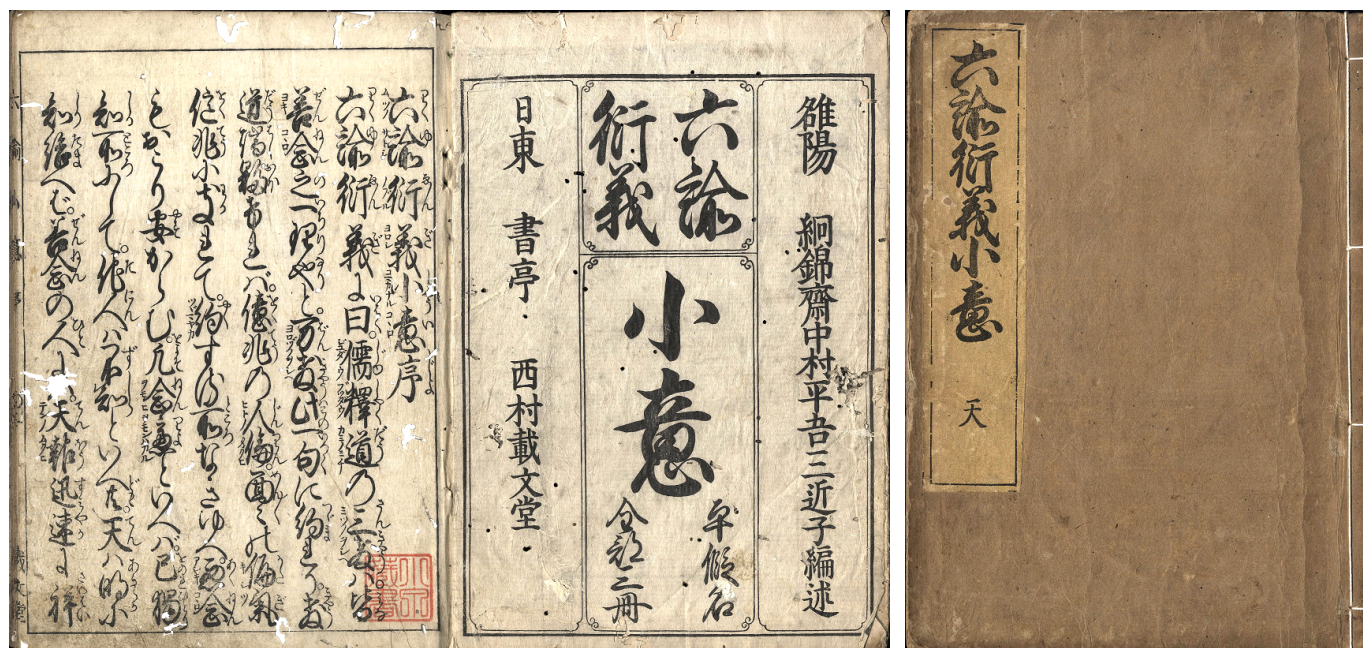


【読楽】016 「六諭衍義小意」を読む * 読楽箇所＝序文および第4章「教訓子孫」後半部



【概要】 * 往来物DBより

六諭衍義小意 【作者】中村三近子(平吾・綱錦齋・一戴)作・書・序。【年代】享保16年(1731)作・刊。【京都】西村市郎右衛門(寿詞堂・載文堂)ほか板。【分類】教訓科。【概要】大本または半紙本3巻3冊、後、3巻合2冊。『六諭衍義大意』の主旨を敷衍した往来物。巷間に流布していた『大意』の尊さを童蒙に教えるために、『大意』の付録として編んだもの。庶民生活上の卑近な具体的例に結びつけるなど、『大意』よりも平易に説くのが特徴。『六諭』を2章ずつ3巻に分け、それぞれの主題に即して3～9の訓話を載せる(合計32話)が、特に力点を置くのは「孝順父母」「教訓子孫」の2章である。俚諺や故事を引きながら『大意』の説く道理を種々諭す。また「和睦郷里」章では、享保15年の京都大火の際に8000人を救った救恤活動を特筆し、「教訓子孫」章では庶民の学問のあり方について「学問は万職の手本」であり、先賢の書を学ばなくても『六諭衍義大意』を実行するならば立派な学問であると述べる。本文は三近子の直筆で、やや小字・9行・付訓で記す。

* 【参考】「六諭衍義」から展開した日本の育児思想(月刊『武道』記事)参照。

【序文】

* 【参考】六諭衍義小意」の2-5頁参照。

【本文】

* 【参考】六諭衍義小意」の49-54頁参照。